

石川雅望「天羽衣」論

—中国典拠との比較から—

石川雅望は文化五年ごろ（一八〇九年、四十五才）中国白話小説を翻案して、読本『天羽衣』、『近江県物語』、『飛驒匠物語』三作を世に出した。『天羽衣』は、『近江県物語』、『飛驒匠物語』と比較して、二巻二冊と分量こそ少ないが、従来指摘された中国小説等の典拠は、白話小説『醒世恒言』巻一「両県令競義婚孤女」（注1）、巻九「陳多寿生死夫妻」（以下「陳多寿」と略す）、および李漁の戯曲『笠翁伝奇十種』に所収される「奈何天伝奇」（以下「奈何天」と略す）と三つもある（注2）。しかし、そのいずれも部分的な趣向を取り入れたにすぎない。作品全体の構成は、実は、白話小説『警世通言』巻二十五「桂員外途窮懺悔」に拠るのであった。本稿は、この新しい典拠を指摘した上で、そのことが作品の読みにどういうつながりを持つのかを論じたいと思う。

一、「天羽衣」と「桂員外途窮懺悔」

『天羽衣』は、上之巻○三保浦、○磯田浜、○舞茸、下之巻○かたみのこがね、○初花たをるなかだち、○尼法師の娘の君、○あまつをとめ、○みぬのこ、という構成であるが、このうち「桂員外途窮懺悔」（以下「桂員外」と略す）の利用は、上之巻○三保浦、○磯田浜、下之巻○かたみのこがね、○みぬのこ、というように「天羽衣」の作品全体にわたる。

登場人物の対応表を参考にしながら両作品の内容を具体的に検証

してみよう。

登場人物の対応表

「天羽衣」

三保の長者夫妻

三保の長者の息子・白良

磯田の長者夫妻

磯田の長者の娘・小松

磯田の長者の息子・黒良

三保家の家僕・久

「桂員外」

施済と妻・厳氏

施済の息子・施還

桂遷（桂福五）と、妻・孫氏

桂遷の娘

桂遷の息子・桂高

施家私塾の先生の息子・支徳

1、三保の長者と磯田の長者は二人とも囲碁が好きな隣近所であるという設定は、従来指摘された「陳多寿」によるが、三保の長者は慈悲心深く、貧乏人をよく助けるという点において、「桂員外」の施済と同じである。

2、三保の息子と磯田の娘は両家の親が約束をした許嫁である。施済の妻厳氏は妊娠中の桂福五の妻孫氏に、もし女の子が産まれたら、息子施還の嫁としてもらうと申し出た。その後果たして女の子が産まれ、両家は親戚同士のように付き合いをする。

閨 小 妹

3、磯田の家が火災にあつて困つたときに、三保の長者は自分の財産を分けて磯田家を助けるに對して、磯田は、三保の援助を受けて、何度も頭を下げ、手を合わせ、「此洪恩は死して犬ともなりて、報ひ奉るべし」と誓う。「桂員外」では桂福五は、商売の失敗で資産がすべて無くなり、妻子を残して自殺をしようとする所で、施済は桂福五に銀三百両を与え、一家の面倒を見る。桂福五は観音太夫に向かつて、頭を下げて「某受施君活命之恩、今生倘不得報答、来世亦作犬馬相報」（施様から命を下されたご恩を受け、この世ではもし恩返しができなければ来世犬馬に成つて報いをする。）と誓う。

このように貧窮に落ちた原因こそ違ふが、磯田の長者も桂福五も相手からの援助を貰い、恩返しを誓うという趣向と表現は一致している。

4、三保の長者は六十才の誕生祝いの日に磯田はじめ村民に貸したお金の借り券を全部放棄して焼いた。「桂員外」では施済は最初から「吾憐君而相贈、豈望報呼」（君を憐れんであげたので、報いなど望んでいない）と明言し、借り券を作らなかつた。

借り券を残されなかつたことで、後、磯田の長者も、桂福五も援助をもらったことを認めない理由の伏線になつてゐる。

5、三保の息子白良は磯田の息子と共に疱瘡にかかつたが、白良だけがその傷で醜い顔になつてしまふ。「桂員外」でも、施の息子は桂の子供と共に疱瘡にかかるが、両家の子供はともに無事に治る。白良だけが傷を負うという設定は「陳多寿」によると考えられるが、「陳多寿」の場合は疱瘡の傷ではなくて、癩病にかかつたのである。

6、三保家の災難は続く。それから三年後三保の長者が突然病死した。「桂員外」も同じく、三年後施済は突然の病気で亡くなる。

7、三保の長者の死後、三保家は段々傾き、召使いたちは三保家を離れていくが、三保家の中にただ一人の老僕久が残り、三保家を助ける。一方、「桂員外」においても施家は次第に没落し、下男下女たちが離れていく。その時、施家の昔の塾の先生の息子支徳が施家にやつてきて施家を助ける。

このように三保家も施家も家長の突然の死によつて、傾いていく事になるが、其の原因の一つを、両者ともに生前過分の施しをしたとする。さらに離れていく召使い達のなかに未亡人と幼い子供を支えてくれる者が現れてくる趣向も同じである。

8、磯田家が三保家の苦難に何の援助もしないのを憤慨し、久は磯田の家に行くことを提案する。その時、三保の妻はすでに磯田家に望みをかけていない。また久には磯田家との争いをできるだけ避けるよう言いつける。

一方桂福五は、施済の死後まもなく施家から遠く離れたところへ引つ越して、名前も桂遷に変え、桂員外と呼ばれている。彼はかつて施家の家から掘り出したお金で事業をおこして、金持ちになつた。その話を聞いた支徳は施還に、現在の貧窮状況を桂員外へ訴え、援助を乞うように提案した。それに対して、未亡人の嚴氏は桂員外の援助に期待しつつ、三保の妻と同じく相手方との穏やかな交渉を願う。

9、磯田家に行った久は、長く待たされたうえ、かつての三保の長者から磯田に對する援助を一切認めてもらえず、最後に追い出されてしまふ。同じく「桂員外」では、施還は桂遷の家に行き、長

く待たされたうえ、かつての借金の証拠（借券）を示せと迫られ、桂遷の妻に追い払われる。結局借金の証拠がないことを理由にして嘗ての援助を認めないという趣向は同じである。

10、貧困に追い込まれた白良と母親は蔵を売り、その跡に父が残した黄金一万両を発見した。施還も生活のために家を売ろうとするところ、部屋の天井から父が残した帳簿を発見し、金の隠し場所と金額が書かれていた。そして帳簿の通り金を掘り出した。

三保家は久の協力で家を立て直し、召使いも戻り、昔のように家業が盛んになる。施還の方は支徳の協力で元の土地を買い戻し家業を立て直す。

11、磯田家では息子の不祥事で国守に逮捕され、財産をすべて取り上げられる。監獄で、磯田親子は初めて三保家の恩に背いた罪を感じ、其の夜磯田の長者は妻も息子も犬になった奇妙な夢を見る。夢から醒めると、妻も息子も同じ夢を見たという。

一方桂遷は官位を買おうとしたが、お金をだまし取られ、そして息子は賭博で土地をすべてとられる。桂遷は自分も妻も息子も犬になっている夢を見る。夢から醒めると果たして妻と息子がすでに死んで犬に再生している現実直面する。

犬になったのはあくまで夢に止まった磯田家と「犬になっても恩返しをする。」という言葉通りに桂員外の妻と息子が犬に成った桂一家の結末は、翻案作と典拠との大きな違いである。

12、磯田夫婦は出家し、後、白良は磯田夫婦を自分の家に迎え、三保家はますます盛んになる。桂遷は罪を悟って、娘を施還の妾に送り、自分の老後の面倒を見てもらう。施還は科挙に合格し、東呉地方の名門になる。

以上比較して見たように天羽衣のストーリーの展開は、ほとんど「桂員外」に沿って進められていることが判る。

二、『天羽衣』と「陳多寿」、「奈何天」

従来典拠として指摘のあった『醒世恒言』巻一「両県令競義婚孤女」（入話の部分）の内容は、次の通りである。

浙江衢州府の王奉とその兄の王春はそれぞれ一女があった。王春の娘は瓊英といい、藩華と婚約中で、王奉の娘は瓊真といい、簫雅と婚約中であつた。瓊英が十才のとき、その両親ともに病死した。

王春は王奉に、瓊英の養育と結婚のことを託して死んだ。のち、王奉は藩華が美男で金持ちで、簫雅が醜男で貧乏だったので、二女の相手を取り替えて嫁がせた。ところが、藩華は放蕩で身をもちくずし、行方不明になり、王奉はやむなく瓊真を引き取るはめになった。簫雅は出世して、尚書に昇り、瓊英は一品夫人を授けられた。

この話を『天羽衣』の典拠とした山口剛氏は次のように述べる。「六樹園は大体此の趣向を借り、王春、王奉兄弟を移して、三保の長者・磯田の長者とし、簫雅・藩華の二人によって、白良・黒良を作り、別に志田の長者を設けて、藩華の役割の一部をあてがった。更に瓊英を小松に引き直し、小松と白良とを許嫁の関係に置いたが、それによると三保の長者は、また簫別駕の役割をも担はせられたわけである。」

山口氏は磯田の長者の三保の長者に対する背信行為を王奉に求めたが、王春と王奉は兄弟関係で、三保の長者と磯田の長者のように恩を仲立ちとした友人ではなく、子供同士が婚約者というものでもない。「桂員外」と比較するとその関係は薄いと言わざるを得ない。

「両県令」は「天羽衣」の典拠から外されるべきであろう。これに対して白話小説「陳多寿」及び李漁の戯曲「奈何天」は確

かに「天羽衣」と関りがある。

「陳多寿」の梗概は次のようである。

江西省分宜県の地主陳青と同地の地主朱世遠は隣近所で、二人とも将棋が好きである。陳青の息子陳多寿と朱世遠の娘朱多福は婚約中であるが、陳多寿は十五才のころから癩病にかかり、病状は悪化するばかりであった。多福の将来を配慮した陳家が婚約の辞退を申し出る。しかし貞節な朱多福が結婚を実行する。結婚三年後、将来を悲観した多寿は毒を飲み自殺をはかる。その時多福も残りの毒を飲み、心中をはかる。幸いに家の人が羊の生血を飲ませたところ、二人は一命を取り留め、多寿は毒薬の働きで癩病が治る。

「天羽衣」において、1、隣近所の陳青と朱世遠はともに将棋の好きな友人である。2、両家の子供同士が許嫁である。3、朱世遠の娘朱多福は癩病にかかった陳青の息子陳多寿との結婚を堅持しようとする、三項目を取り入れたと考えられる。

また、『笠翁十種曲』第十一、十二冊「奈何天」の概要を簡単に記しておく。

闕里候という金持ちは、生まれつきの醜男である。あわせて三人の美人を妻にしたが、三人とも彼のところに近づこうとしない。闕里候自身も美人妻の悩みが分かっているのに、別居を許す。一方彼は軍資金を寄付したり、金で官位を買ったりして、皇帝から表彰された。さらに天帝は変身使者を派遣し、入浴の際彼の容貌を変えて、美男に仕立てあげる。

天女の化身である雲井の勧めで海水に浴し、忽ち生来の美貌を取り戻した白良の奇跡が「奈何天」に基づいたのはすでに指摘された通りである。

「天羽衣」は、このように基本的に白話小説「桂員外」の構成に基づき、それに従来指摘された白話小説「陳多寿」、戯曲「奈何天」を部分的な趣向として取り入れて成ったものである。

ところが典拠となった三つの作品は、本来全く違う性格をもっている。

「桂員外」は、もともと仏教の輪廻思想に基づいたもので（注3）、この世に罪を犯したものは来世に畜生に再生するとの考えで、桂員外の妻と息子が犬に変わった結末になっている。つまり桂員外一家の背信行為に対する非難に物語の重点が置かれている。

一方「陳多寿」は、烈女伝の系統を引いた物語で儒教的道德観念を強く出している。そこで女主人公朱多福は、病気で死にかかりそうな婚約者に対して死んでもその男に従い、最後まで尽くすという女性のモデルになっている。

更に「奈何天」は、天帝が仙女を派遣し、醜男を美男に仕立て上げる話で、基本的には道教の神仙思想がその背景にある。

雅望は仏教色の強い作品「桂員外」と、儒教色の濃い「陳多寿」、道教的な「奈何天」を「天羽衣」という一つの物語に取り入れ、翻案したわけである。

三、人物像

次にこれらの作品と「天羽衣」の人物像との関係を見よう。

三保の長者と磯田の長者がそれぞれ善玉と悪玉として設定されている。上述したように「桂員外」の施済、桂遷との対応関係も明らかである。もつとも磯田の人物設定には「陳多寿」からの影響も窺うことができる。

「話説江西分宜県有兩個莊戸人家、一個叫做陳青、一個叫做朱世遠、兩家東西街對面居住。論起家事雖然不算大富長者、靠祖上遺下些田業儘可溫飽有余。那陳青與朱世遠皆在四旬之外、累代隣居、志同道合、都則本分為人。不管閑事、不惹閑非。每日喫了酒飯、出門相見、

只是一盤象棋、消閑造日。有時疊為賓主、不過清茶寡飯、不設酒肴以此為常。」(さて、江西分宜県に二人の地主がいた。一人は陳青といい、一人は朱世遠という。両家は東西を走る道の向かいに住んでいる。大した金持ちではないが、先祖から残した土地財産を頼りにして不自由のない生活をしている。陳青も朱世遠も皆四十代で、代々の隣人同士で、志も同じ、身分相應な事をして、世のつまらぬことに興味もなく静かに暮らしている。毎日食事やお酒の後、出かけて将棋を指したりして、のんびりと日々を送っている。時にはお互いにもてなしの食事もあるが、お酒を出さないのは普通であった。)

朱世遠は陳青と同じように悠々自在の生活をしながら、趣味の将棋をさす毎日である。二人ともまたおとなしい性格で、よその世俗的なことには全く興味を持たない者である。すでに前述したが、朱世遠は婿の陳多寿の病氣に対して、気にしていながら、一旦の契りを重んじる義理がたい人で、決して相手を裏切ることをしていない。陳青も朱世遠も物語りの中で終始対立する事はなかった。

「天羽衣」では、磯田の長者は、三保の長者と同じく囲碁の興味を持つ点では朱世遠と同じでありながら、相手・三保の長者の死、婿の病氣によって、三保家にたいして裏切り者にならされた。久の来訪に対して、いままでも三保家との関係をつよく否定し、「汝が主の家、おとろへ行きしは、天運のする所なり。我しれる所にあらず。古き諺にも、頭に集る蠅は、おのがじゝ打はらふといへり。いかで我家にもあらぬ、他人のいとなみを、しるべきか。汝が詞に、兄弟のむつび、婿の約束したりなどいへる、皆あらぬことなり。さやうの契り、かりにだもしつる事なし。老ぼけて、あらぬよまひごとをいふならんとそうそぶきていふ。……我家汝が主人より、露ばかり、物を受けたる事なし。貧にせまりて、作りごとをかまへて、い

ふにこそ」と、この磯田の長者の変心には唐突の感を免れない。これは雅望が磯田の長者の人物造形を、「陳多寿」の朱世遠から、「桂員外」の桂遷に求め換えた結果であろう。「桂員外」において、桂遷の人物像に見られる投機的な性格は、最初、事業の失敗からすでに現れた。施済の息子との婚約も将来施家に頼るためだという思惑があった。人の言うことに惑わされて、農業をやめて商売に手を出した桂遷は、今度は命の恩人施済のお金を横取りしてしまう。ひとたびは金持ちになったが、また官位を買うため人に騙され、財産を取られるという有様であった。施済の死後、施家を裏切ったのは、彼の一連の行動から見れば何の不思議も思わない。しかし物語全体で悪役のない「陳多寿」において、朱世遠は貞節を守る娘・朱多福の支えになっている。雅望は磯田の長者を最初に朱世遠と同じ設定をしなが、物語の運びによっては悪玉の桂遷とすり替えた。

ただ、磯田家を桂遷一家のように死後犬になったのではなく、救われるという結末だ。桂遷一家の地獄体験は、仏教説話の名残をそのまま取り入れた「桂員外」物語の最も重要な部分であるにも関わらず、雅望はこの結末を変え、典拠の骨髄を抜き取ってしまった。さらに物語全体のバランスを整えるために、磯田家を救う人物として、磯田の娘・小松の造形に工夫を加えた。

一家全員が悪人で、婚約の解消に両親の言いなりに成っている桂遷の娘は「桂員外」の中で殆ど登場しない人物であった(注4)。しかし「天羽衣」では小松は、「あはれ此娘、さる無残なる親の子にして、さばかり道をたて、こころざしを守れる事、叟が子に舜の生まれ給へるにことならず。いみじくやさしき心にぞありける」とあるように、忘恩不義の磯田夫妻の子と生まれながら、一旦の契りを重んじて、貧窮の上かつ容貌の醜い白良との結婚を堅持する女として登場するのである。従来小松の人物像について、「陳多寿」の朱多福との影響関係が指摘されている。しかし、両者には大きな違

いがある。つまり親子の関係において、「陳多寿」では陳多寿が婚約の辞退を申し出たところ、娘の将来を心配して、一度婚約の解消に応じた朱多福の両親は、自殺まで計って結婚を堅持しようとする娘の貞操ぶりに感動して、心替えて娘を陳多寿のもとに送るのである。特に朱多福の父親は、娘のよき理解者として描かれている。かれは義理を重んじ、妻の愚痴を聴かされながら、自ら占いを求め、娘の明るい将来を信じて、嫁に出す決意をしたのである。

○朱世遠與陳青肺腑之交、原不肯退親。只為渾家絮聒不過、所以巴不得撒開、落得耳邊清靜。誰想充恁般烈性、又是一重歡喜、便道：「恁の時、休教苦壞了女孩兒。你與他說明、依旧與陳門對親便了。」（朱世遠は陳青と肺腑の交ほどの友情関係である。もともとと婚約解消に消極的だったが、煩く文句を言う妻に仕方なく妥協して婚約の辞退に応じた。しかし絶対これを聞き入れない娘を見ると、また喜んでいて。「このようだったら、娘を苦しめない方がいい。相手に説明をしてやはり結婚しよう。」と妻を説得した。）

○真烈女也。為父母者、正当玉成其美、豈可以非理強之。遂將城隍廟籤詞、說與渾家道：「福寿天成、神明嘿定。若私心更改、皇天必不護祐。況女孩兒吟詩自誓、求死不求生。……据吾所見、不如把女兒嫁與陳家、一來表得我們好情、二來遂了女兒之意、也省了我們幹紀。……（誠に烈女である。父母となるものは彼女の美しい心を実現させるべきだ。どうして無理に強要することができようか。そして、城隍廟でもらった占いを妻に話した。「福寿天成、神明嘿定。若しその心を変えたら、天帝は保護してくれない。まして娘が詩を作り自ら誓いをして、死を選んで生を求めない」とまで言う。私の考えでは寧ろ娘を陳家に送り、一つは我々の好意を表す。もう一つは娘の心を慰める。そして我々の心配することもなくなる。」）

一方、「天羽衣」における小松は、義理を重んじ、心の優しい父親を持つ朱多福と違って、悪人一家の中でただ一人約束を守ろうとした。朱多福より厳しい状況に置かれていたにも関わらず、彼女は自殺を図るなど烈女のような激しい行動を取らずに、親の不義への非難に止まった。朱多福は婚約相手の陳多寿との間に結婚の約束を守る意志を伝える詩を何回も交わしたが、小松は白良へ自分の意志を伝えようとしなかった。積極的な行動を取り、自分の運命を決める朱多福の烈女像を小松に取り入れられながら、小松の運命を、結局天女の化身・雲井に委ねられた。「これなる人は、磯田の娘にて、わ君といひなづけありし、小松女なり。ひがみたる親兄の詞に従はず、終身を三保の家によせんと、貞を守るころざしのいとほしければ、これまで具して、ともなひ来つ。家にとまひて夫婦の契し給へ。」と、雲井は小松を白良の家まで連れてきて、二人を結ばせる。

また小松の貞節によつて磯田家が救われるというのは、烈女伝物語の基本的な構図である。

結婚後、親と兄に対する小杉の心配があったこそ、白良は「小松も常にそたちのうへを愁へて、なげきてあれば、いずれにつけても、おのれよきにはからひてん」と磯田夫婦の養老を快く引き受けただけではなく、黒良にも「財をわかちあたへて、ふたたびもとのやうに、いとなみをさせつ」のであった。

典拠「桂員外」の場合、妻と息子が死んで、施家の犬に化身したのを見て、桂遷は、罪を懺悔して娘を施還に妾としておくろうとしても、施還に何回も断られ、最後に妻と息子が犬になったことを告白して、やっと受け入れられた。桂遷と娘は、犬になった夢と現実を告白すること、又、死んだ妻と息子のために念仏すること、一家の忘恩不義に対する償いをしているが、妻と息子の死は、すでに桂家の滅びを意味する。つまり典拠は因果応報の理によつて善人栄え

悪人滅びるという結末である。雅望は「天羽衣」の小松に「陳多寿」の烈女朱多福の要素を取り入れ、小松の役割を大きく働かせたことで、典拠「桂員外」の結末を和らげたのである。雅望はさらに自ら翻訳した『通俗排悶録』巻之三貞烈之部「金三妻」の結末を参考にしたと思われる。「金三妻」においては、病気になった婿を棄てた両親に対して娘が、堅く再婚を拒んだ。後、婿が金持ちになつて帰ってきたところ、両親が感涙を流して罪を認め、娘夫婦は快く親の老後を見ることにした物語である。

これから白良の人物像を見よう。

先に挙げた人物の表からも分かるように白良と対応するのは、施済の息子施還である。父親の死後母親と苦しい生活を強いられながら、隠した遺産の発見で家業を立て直しに成功した人物である。ただし白良は、施還のように経済的な苦難を乗り越えるだけではなく、更に疱瘡で顔に傷が残されたという二重の試練を背負っている。これは先述したように「桂員外」の施還の他に、「陳多寿」の主人公陳多寿も白良の人物造形に関わっているからである。癩病にかかった陳多寿は、殆ど外出をせず、自ら婚約を解消すると言いだしたり、結婚後にも妻の朱多福の将来を心配して、自殺しようとしたりとした内気な性格の持ち主である。慈悲心の深い父親のお陰で苦難を乗り越えた施還と、一筋に婚約を守ろうとする烈女の妻のお陰で命を救われた陳多寿は、共に白良という人物像に投影されている。

父親の死と疱瘡で醜い顔になったことで、「学問にのみ、心をいれて、ひたすらとじ籠り」する白良は「鏡に向ひても、我身ながら、うとましき面ばせなれば、若き心には、恥おもひて、みだりに外に出る事もせざりき。今日は母のしひて進め給へればとて、たゞ一人磯辺づたひに、あゆみ往ける」際に天女から羽衣を預かった。つまり世間を離れ、隠遁者として身を隠れようとする時に天女に出逢った。しかしこの羽衣は黒良に奪われ、白良の苦難は暫く続く。結局

父親の遺産発見と小松の到来は、すべてこの羽衣の帰還後に待たなければならなかった。最後までやはり天女の加護で奇跡的に元の美貌に戻り、めでたく小松と結ばれたのである。李漁の「奈何天」との関係を考えて、「天羽衣」の結末は、天帝から派遣された変心使者の力で美男に仕立てあげられた關里候の劇的な変化を取り入れられたと言える。しかし、次々と妻を買ったり、官位を買ったりして金を恣に使う關里候の人物像と全く違う白良は、大事な羽衣を黒良に奪われても、無理に取り返そうとしないし、小松との婚約を自ら解消した後も「今はたえて妻をも妾をもむかへじ。生らんかぎり、やもめにてあらんとぞ、心を定めていひける。」ほど陳多寿のように占いを求め、自分の人生に失望し、死を選んだりしなかった。白良はただ一つだけ「天女より羽衣を預り奉りて後、一千日の日数もはや翌となりぬ。明なば、三保の浦に至りて、天女の来降を待て、衣を返し奉るべし」と、天女との約束を守るに終始した。ただし、すべてが天帝の主宰する天界に支配されている点では、「奈何天」の神仙思想と基本的に通じている。

注

1、山口剛、名著全集『読本集』解題（一九三〇年）

2、重友毅氏は「六樹園の雅文小説」（『近世文学の位相』一九四四年）、作品論には、鈴木敏也「浪漫小説家としての石川雅望」（『近代国文学素描』所収。一九三四年）、麻生磯次「江戸文学と支那文学」（一九四六年）、稲田篤信「江戸小説の世界」（『秋成と雅望』（一九九一年）などがある。

3、白話小説「桂員外」は当時読まれている文言小説集『寛燈因話』『桂遷夢感録』に基づいて作られた物語である。なお「桂員外」については、伊丹椿園の『唐錦』（安永八年、一七七九年）巻二「佐々木曹五茶師紹芳を打つ話」、「古今奇談」（文化二年）巻三「陰徳再福」との影響関係があったと、徳田武氏が（『江戸漢学の世界』）指摘をさ

れていたが、「陰得再福」のほうは「桂員外」ではなく『剪燈新話』巻一「三山福地志」によると思われ、後、別論で詳しく述べる。

4、「陳多寿」にも「桂員外」にもなかったこの人物像の設定は、秋成の『春雨物語』『死首の咲顔』で描かれた、父親と似ない心の優しい男五蔵を思い出される。一人息子の五蔵が親の反対にも関わらず貧乏な女との結婚を堅持するのは小松と同じである。しかし、儒教的な道徳で最も重用視される孝に対して、正面から対立する五蔵は、不孝という重い罪を負わなければならない。小松は悪人の親との対立をしながらも親不孝の罪を問われない。女は一旦婚約したら、夫に従うべきものだと思われたのである。そこで小松は親に対して「又我身、かの家と縁をくみて聘物とて金うけとり給ひしことは、乳母が物語にて、くわしく聞おきて候。白良どの、たとひ醜く、貧き人にあれ、一たび、夫と定め給へれば、今さらこなたより、縁をたつべきことわり候はず。女は二人の夫をかさねずと申すことは、仮名草子、物語のふみにも、しるし候へば、わらはよくわきまへて候を、強てかしこの縁をたちて、異所へよめらせんと、し給ふは、父母の慈悲には候はず。みづからを不義に陥れ給へるなり。三保の家、今貧くなりてありとも、女の道は改むべき道理候はず。」と、自ら白良との婚姻を堅持する正当性を訴えた。小松と比べると、親の前で五蔵がいかに手弱いと見えるが、儒教的な道徳観の支配された時代には五蔵は不孝の罪を負いながらも、自分の行動を正当化する理論付けはなかったのである。小松はあくまで従来の儒教的な価値観に基づいて作られた烈女であるに對して、五蔵は生産性もなく形もないものを求める「かひなき」な人間像である。小松は親を救ったというめでたい結末を迎えたが、五蔵は相手の女を死に追い込み、自ら家を破壊したのであった。

「天羽衣」は『石川雅望集』（校訂Ⅱ稲田篤信）国書刊行会、「桂員外」は『警世通言』、「陳多寿」は『醒世恒言』中国人民大学出版社、「奈何天」は『李漁全集』浙江古籍出版による。なお中国語の簡体字を旧字に変えた。

付記

本稿は平成七年度日本近世文学会春季大会における口頭発表に基づいている。